

## 内閣府主催

『令和7年度障害者週間における「心の輪を広げる体験作文』』

最優秀賞（内閣総理大臣表彰）受賞作品

ありのままの私を受け入れてくれたあなたへ

熊本県立黒石原支援学校 中学部三年 笹原 遥

私という存在を消されていくような日々だった。当時不登校真っただ中、暇を好物に、どんどん育っていく不安と焦りを持て余していた私にとって、平日の朝から夕方にかけての間、家で退屈にしている時間というのは、本当に心をむしばむものでしかなかった。ひとりで外出する元気もなく、ただただ布団の中で、時間がすぎるのをじっと待っていた。そんな私を見かねた母親は、私の居場所が必要だと判断して、近所のデイサービスに通所させた。

デイサービスの水曜日の活動は、茶道だった。私はそこで茶道の先生である「牧野先生」と知り合った。牧野先生は、とても教えるのが上手で、何度も丁寧に作法を教えてくださった。そのうえ、とにかく優しく穏やかな方で、私が正座に耐えられず、ブルブルしているのを見ると「いいのよ。足を崩しても！無理しないでね。」と慌てておっしゃったことも少なくなかった。たまに「家の片付けをしていたら見つけたの。私はもう使わないから、良かつたら。」と言つて、とても綺麗な髪飾りをくださることもあった。私はすぐに牧野先生が大好きになつた。

ある水曜日、私はいつものように牧野先生と向かい合つてお茶の稽古をしていた。その時、ふと、牧野先生は、私の手を取つて「まあ、可愛いおてて。柔らかくて、温かいですね。やっぱり若いからかしら。」と微笑みながらおっしゃつて、私の手なんかよりも、ずっとずっと温かく優しいその手のぬくもりを移すように、何度も何度も私の手を撫でてくださつた。私は思わず泣きそうになつて、「ありがとうございます。」と言つたきり、話すことができなかつた。

不登校になつてから、人に優しくされたことはきつとたくさんあつた。けれども、私にとって、その優しさの全ては「私を学校に行かせるためのもの」としか思えず、素直に優しさとして受け取ることができなかつた。どんなに優しい言葉をかけてもらつたとしても、今の、「不登校の私」を受け入れてくれる人はいないと、捨くれるばかりだつた。

そのうえ私は、幼い頃から、容姿のことでからかわれることが多かつたので、「あるほど。私は笑われるような見た目をしているのだな。」とばかり思つて、容姿には自信がもてなかつた。特に手は、相当ひどいものなんだろうなと思つていた。

今では、そんなことあるわけないと思っていることができている。容姿についてのから

かいも、私を苦しめようと思つて言われたものばかりではなく、むしろその逆だつたと思うことができる。でも、当時の私にとつては、その記憶たちは、生ぬるい地獄を加速させる呪いのようなものに他ならず、「忘れてしまおう、忘れてしまおう」と強く念じてゐるうちに、本当に様々なことを忘れてしまい、あの頃受けた優しさのほとんどを、もうほんの少しがれど思い出しきれないでいる。

そんな苦しい思いを抱いていた時、牧野先生は、私のその笑われてしまつたような醜い手を、わざわざあのきれいな両の手で、離さないとばかりに握りしめてくれた。そして、「かわいい」「やわらかくて温かい」と言つて、大事なものを撫でるような手つきで撫でてくれた。驚いて、思わず見上げた牧野先生のお顔は、ただただ愛おしさに溢れていたものだから、忘れることなんてとてもできなかつた。あのときの私は、どんなに言葉を尽くそうとしても、きっと「ありがとうございます。」としか言えなかつただらうなと思う。

あの時の牧野先生の言葉と手のぬくもりからは、当時私が感じていたような歪んだ優しさや、呪いになるようなものを全く感じなかつた。思わず見上げたそのお顔は、眉を下げるだけでも愛おしさに満ちていた。ひたすら胸に込み上げてくるものを抑えることができず、家に帰つてから、牧野先生の言葉を何度も反芻しては泣いた。

それから数年後。私は熊本再春医療センターへの入院が決まり、とうとう最後のデイサービスの水曜日を迎えることとなつた。牧野先生は、いつも通り私がお茶を点てるところを黙つて見ていらつしやつた。稽古が終わると、牧野先生は、「あなたは本当によく頑張つてゐる。本当に。本当に。私が言つうんだから間違いないわ。この歳で入院するという大きな決断をしたのよ。他の人ではそう簡単にできないわ。どうか自分を認めてあげてね。けれど、きっとどうしても辛くて逃げ出したいくてしようがないときがあるわ。とっても頑張つてゐるあなたが、どんなに頑張つても、どうしようもないときが、きっとあると思うの。そういうときは私の家に来ていいくからね。逃げ出していいからね。あなたのお話を聞いて、お茶を点てることしかできないけれど、それでもいいならいつでも来ていいからね。いい? 約束よ。あなたは覚えるのが早いから、教えるのが楽しかつたわ。ありがとう。」と言つてくださつた。

お礼を言わなければならぬのは私のほうだ。本当に、何度感謝しても足りないほど感謝している。私がその言葉に一体どれほど救われたことか。ありのままの私を認めてくれる人なんていないと思つていて。本当の優しさなんでものは、この世に存在しないと思つていて。でも牧野先生は、あの醜い私の手をとつて、「かわいい」と言つてくださつた。こんな自分に、「辛いことがあつたらうちに来なさい」とわざわざ言つてくださつた。何度その言葉を頭の中で反芻したことか。あなたが、最後にかけてくださつたその言葉が、いかに私の心を照らしてゐるか。私が今まで生きてきた十五年という月日の中で、あなたの言葉はありえないほどに輝いて、私が前に進む力となつてゐる。